

北の療育

社会福祉法人北海道療育園
美幌療育病院開院20周年記念植樹

- 美幌療育病院開院20周年／式典・公開講演を開催
- 令和4年度決算報告

● 巻頭随想

- ・ トトロの世界がみえますか ————— 松尾 彰久 — 1

● 監事の拝命にあたって

- 社会福祉法人北海道療育園 監事 石本 一三 — 6

● = 美幌療育病院開院20周年 =

- ・ 記念式典と公開講演会を開催して ————— 加藤 秀行 — 7
- ・ 美幌療育病院20周年記念植樹を終えて ————— 梶田宗一郎 — 10

● グラビア 美幌療育病院20周年記念事業／花火・夏祭り 12



● 療育園夏祭り、花火大会を開催して！ ——— 田邊 理沙 — 17

● つつじの里夏祭りを開催！ ————— 杉原 直樹 — 19

● サンプルーム・春から夏の療育活動

- ・ 春から夏の行事・活動 ————— 北海道療育園 — 大山理紗子 — 21
- ・ 暑い夏でも楽しいサンプルーム活動！— 美幌療育病院 — 三澤 陵子 — 23

● 訪問看護ステーション「けあぶらす」の活動紹介 — 神田 友行 — 25

● つーるぼっくす（リハビリテーション工学）からの支援

- ・ ー最近の取り組み 3Dプリンターを活用してー ——— 舟木 裕人 — 27

■ ワークセンターぴぽろ

- ぴぽろだより
・ 園庭散策、農作業始まる、初夏のひととき「かき氷」 他 — 浦野 紘史 — 33

● あすなろ通信

- ・ 花壇の整備、陶器 他 ————— 内田 久勝 — 35

● つつじの里だより

- ・ 春から夏の活動紹介 — 鈴木智子／長能博明／桑山美弥／石田絵里香 — 37

● みち

- ・ 全国重症心身障害児（者）を守る会
北浦雅子会長のご逝去について ————— 齋藤 忠義 — 39
特定非営利活動法人 とらいあんぐる事務局通信
- ・ 病院・職員様への感謝と姉への思い ————— 泉本 謙一 — 42
美幌療育病院父母の会事務局通信
- ・ （続）全道全国の仲間と連帯していく ————— 植村 規 — 44
つつじの里利用者と歩む家族の会事務局通信

● 令和4年度決算報告 ————— 49

● ご厚意ありがとうございます

- ・ 寄付金一覧 ・ 物品寄贈一覧 他 ————— 63
- ・ 職員異動一覧 ————— 64

インフォメーション

- ・ 社会福祉法人北海道療育園役員一覧 ————— 5
- ・ 法人監事の岩織卯一先生が退任、新監事に石本一三先生が就任されました。 ————— 5
- ・ 第10回美幌療育病院花火大会を開催して／加藤 恵 ————— 11
- ・ イオンの「黄色いレシート運動」でアウトドア用品などを購入／今年もトマトの苗をいただきました！ — 16
- ・ 作業療法作品の紹介「お楽しみ献立、大好きすぎてポスター作ってます！」
第三療育課 泉谷康文さん ————— 29
- ・ 福島的美味い桃をどうぞ！ーミスピーチ・4年ぶりに来園、利用者さんと交流ー ————— 30
- ・ 防災訓練で、放水訓練を実施 ————— 30
- ・ 園庭に点在する彫刻を鑑賞してみませんか？ー「風のギャラリー・彫刻の森」についてー — 31
- ・ コラム 岩手県・カナンの園の修養会と“神様、に出会った話／蒔田明嗣 ————— 47
- ・ 夕陽ヶ丘保育所で夏祭り！ ————— 60
- ・ ブックススタンド「虹の生まれるところ」 有沢 螢 著（オリエンス宗教研究所） ————— 61

トトロの世界がみえますか

松尾 彰久

スタジオジブリの宮崎駿が原作・脚本・監督を担当して制作されたアニメ映画『君たちはどう生きるか』がついに先日（七月一四日）封切りされた。事前の宣伝がまったくないかたちで公開されたことが話題をよんでいる。これまで宮崎駿の作品はどれもみなおもしろく見ていたので、今回もまた期待しながら映画館に足をほこびたいとおもっている。

ジブリ作品といえば、（わたしのばあい）何と言おうと『となりのトトロ』がうかんでくる。愛くるしい風貌が印象的なトトロは、主人公の姉妹サツキとメイが引越してきた田舎の裏山に住んでいる。その森の守護神のような存在である……と言っても、サツキとメイのような子どもにしか見えない世界のようなのである。現代においては大人になるにしたがつて失っていく、自然の神秘的な営みを素直に受け入れられる子どもの感性でしか見えない世界（ウラの世界）かもしれない。わたしたちがふだん生活するこの世界（オモテの世界）は、自然をつうじてウラの世界とつながっている。そして人間もまたその自然の一部であるから特別な存在ではないという、日本人独特の自然の感じ方、とらえ方を象徴しているようにおもわれる。

そしてジブリ作品のなかで最もヒットしたのが『千と千尋の神隠し』である。主人公の千尋が引越しをするところとちゅうで、両親とともに不思議な異世界に迷い込んでしまう。両親は魔法で豚の姿に変身させられ、千尋は両親を救うために八百万（やおよろず）の奇怪なすがたの神々が集まる「神隠しの湯」ではたらくことになるのだが、こちらは太むかしから日本人に信じられてきた民衆信仰の異世界を表現しているのだろうか。いわばこの物

語も「この世」ではない「あの世」の世界であり、オモテの世界に対するウラの世界を表現している。非科学的で何のエビデンスもない世界観である。しかしわたしたちは、これらのアニメ映画を見て、何かしらの郷愁というか、心がやすらぐような共感をおぼえずにはいられないのである。

いずれにしても作者の宮崎駿は、まだ日本人のこころに幽かにのこる自然と異世界を含めた世界観こそ大切にすべきではないかと訴えているのかもしれない。現実社会を自然科学の論理ですべて説明しようとする科学信仰（科学主義）への警鐘かもしれない。

日本民俗学の祖とも泰斗ともいわれる柳田国男は、このような日本人の考え方について、自著『先祖の話』（一九四五）で次のように書いている。

「私がこの本の中で力を入れて説きたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土に留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、恐らくは世の初めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。」

「世の初め」というから日本に仏教や儒教、キリスト教などが伝わってくるもつとまえ、縄文の初めころ（一万五千年ほどむかし）までさかのぼるのであろうか。そして、そのような信仰はわたしたち日本人の遺伝子に染みついて代々引き継がれているのだろうか。ジブリ作品から感じる郷愁のようなものの源泉であるかもしれない。そして大事なことは、霊（魂）は「そう遠くへは行ってしまわない」というところである。仏教のいう十萬億土離れた極楽浄土でもなく、キリスト教のいう天国のかたてもなく、目には見えないが、どこか生きているわたしたちの近くにいたのである。

そしてやがては、「人は亡くなつてある年限を過ぎると、それから後は、御先祖さま、またはみたま様という一つの尊い霊体に、融け込んでしまうものとしていたようである。」と柳田は言っている。「一つの尊い霊体に、融け込んで」とはどういうことか分からないが、それぞれの霊（魂）がわたしたちを見守ってくれている守護神のようなものに統合されるのであろうか、あるいは統合されて自然と一体のようなものになるのかもしれない。

北海道療育園は今年度五十四周年を迎えた。この間に多くの利用者が亡くなっている。毎年家族や利用者の代表、職員など関係者が集まり、園庭の一角に建てられた「いつくしみの像」前に祭壇を設け、かれら（物故園児）の慰霊式を無宗教のかたちで執り行っているのだが、この「いつくしみの像」は、昭和五十三年（一九七八）に旭川在住の彫刻家寺原実さん（日彫展会員）によって制作された作品（写真参照）である。看護師とふれあうこどもの像と、その後ろのレリーフにはここで亡くなられたこどもたちの霊（魂）が天にゆっくり昇っていくようすが彫られている。看護師とこどものブロンズ像がオモテの世界であり、レリーフに描かれたこどもたちの霊（魂）はウラの世界である。

柳田の言っていたとおりだとすれば、かれらの霊（魂）は、今もこのあたりの中空（なかぞら）をゆるやかにおよいでいるのだろう。ある家族の方は「わたしも、きっとそんなふうではないかと、どこか近くにいるように感じています。」とおっしゃられていた。

ひよっとするとかれらは、トトロたち（中トトロ、小トトロも）といっしょに樹の枝にのって、わたしたちを見守っているかもしれない。サツキとメイ、あるいは千尋ならば、そのあどけないすがたが見えるだろう、と想像してみたい。そのような世界観があってもよいのではないかと考えている。

もしそういう考え方をするならば、日々重症児者の療育にたずさわるわれわれの行為や行動は、過去や現在の経験からのみで組み立てるのではなく、未来（と言ってよ



園庭に設置された「いつくしみの像」(1978年)
制作者：寺田 実 氏

いかわからないが）からの思いやまなざしもくみ取れるのではないだろうか。宮崎駿はこのような失われた未来の復権をめざして作品を紡いでいるのかもしれない。

さて、『新版 重症心身障害マニュアル』（二〇一五）の「はじめに」において、監修者である当法人の岡田喜篤前理事長は、「重症心身障害のある人は世界中に多数いますが、わが国のように医療・教育・福祉を渾然一体として提供している国はほかにありません。（中略）こうしてみますと、わが国の重症心身障害児（者）の入所施設、短期入所制度、通園制度、学校教育、その他多くの人たちが創意工夫をこらして実践している家族支援の数々など、そのすべてがわが国独自の創造的所産であり、いわばわが国の文化とさえいえる状況にあると思われる。」と書いている。

どうして日本にだけこのような重い障害をもつ人たちのために重症児の制度をつくることができたのか。そしていま現在も多くの人たちがその障害児（者）たちに真摯に向きあい、実践にたずさわってきているのか。この国にあるはずのその源泉は、いったいどこにあるのだろうか。もしかすると、日本人のところに柳田国男のいう精神性や宮崎駿の示す世界観がまだ少しは残っているからではなからうかと、わたしはおもっているのである。



●まつお・あきひさ

社会福祉法人北海道療育園・専務理事・事務局長